花と香りに包まれて―

咲き誇る深山神社の大藤

旧鳥取村の村社である深山神社境内の大樞（おおかや）とともに、町の天然記念物に指定された大藤が、今年も見事に咲き誇りました。樹齢500年（推定）といわれ、根周り約4メートル、枝の張り出しが15メートル以上にもなる大樞に巻き付いた4本の大藤は、樹齢が300年以上ともいわれています。

5月初旬に満開を迎えた大藤は、大樞の緑から流れ落ちる滝のように優雅に咲き乱れ、甘く優しい香りを放ちながら、訪れた人々を魅了していました。

藤の花といえば、古くから日本の歴史と深く関わりのある花で、古典や絵画にも数多く登場します。藤の花のつつましやかな美しさと控えめな色合いが、多くの芸術家に影響を与えてきたのでしょう。まるで静かに雨が降り注ぐように、連なる花を垂らす藤の花には、多くの人を魅了する美しさがあります。

藤は多くの和歌にうたいこまれ、万葉集や新古今和歌集などの歴史的な書物にも数多く登場します。

新古今和歌集に、紀貫之（きのつらゆき）が詠んだ面白い和歌が残されています。『暮れぬとは思うものから 藤の花さける宿には春ぞ久しき』というもので、現代語訳すると「春は過ぎてしまったと思っても、藤の花が咲いている家には、まだまだ春の趣が残っている」というもの。

この和歌に詠まれた「藤の花」は、当時絶大な権力を誇っていた「藤原氏」を指していて、職業歌人だった紀貫之が上司にあたる藤原氏の「ご機嫌取り」をしたという意味合いもあるそうです。

春の訪れとともに一斉にその花を咲かせ、上品な香りを放つ藤。日本を代表する花であり、情緒あふれる姿だからこそ、庶民から貴族まで広く愛でられたのでしょう。藤の花に重ねられた人々の思いや願いに目を向けると、これまでとは違った魅力を感じることができるかもしれません。

地域の方に話を聞きました

たくさんの方に大藤を見て、楽しんでほしい

大藤の管理は深山神社の役員７人で分担し、私は平成19年ごろから参加しています。年に１度肥料を与え、定期的に異常が無いか確認をしたり、清掃や枯れ枝の整理も行います。役員だけでなく、地域の方も一緒に大藤を見守ってくれていると感じています。

大藤を見に来た方に「とても綺麗だね」「こんなに大きくて立派な藤は見たことない」と声をかけてもらった時にはやりがいを感じるし、とても嬉しいです。

今後は、安全に安心して大藤を楽しんでもらうために、周辺環境の整備にも取り組みたいと思います。毎年綺麗な花が咲くように、これからも皆さんと協力して大藤の管理をしていきたいです。

後藤　喜好（きよし）さん（鳥取）